

拝啓

皆様、こんにちは！ 景気に負けずに頑張りましょう！

ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。喜んで頂ければ幸いです。

歴史に学ぶリーダーシップ

財政難の時こそ人づくりが大切」細川重賢

昨年リーマンショック以来、日本の企業はリストラ(リストラクチャリング再構築)が盛んだ。しかしこのリストラを「何の為にやるのか？」という目的を創出し、どちらかといえば何でも節約、働き者いじめに終始しているのが現状だ。

本来は、「不況になっても絶えない客のニーズに、的確に対応するための改革」がリストラクチャリングのはずだ。

このリストラで標的にされているのが、3K と呼ばれるものだ。会議・広告・研修である。

しかし江戸時代の肥後熊本藩主であった細川重賢は「財政難の時こそ、人づくりが大切だ」と強調した。つまり彼に言わせれば「カネもモノもない藩内で、一番可能性を持っているものは人間だ」という認識であった。

又彼は「財政難というのは危機だ。異常事態である。したがって、組織に属する者はそれぞれ自分の中に潜んでいる『異脳』を掘り起こして、これを役立たせねばならない」と告げた。

そして「その為には研修機関を強化拡充する必要がある」といって、新しく学校をつくった。

学校の名は「時習館」とした。

これは『論語』にある「時に学んでこれを習う、またよろこばしからずや」から取ったものだ。

初代の学長に任命したのが、秋山玉山という学者である。

重賢は玉山に言った。「先生、教育者は国家の名大工さんだ」と思い下さい」

面白い言い方である。

重賢が言いたかったのは、「人づくりは、名大工が材木を選び、削り組立て、見事な建築物に仕立て上げるのと同じだ。」ということだろう

だから「人づくりは木づくりだ。したがって木くばりが大切だ。」と言った。

木くばりとは「相手がどんな木か確定すること」である。

つまり「同じように木くばりしても、松、檜、杉、櫟、ブナ、あるいは楠の木などの違いがある。

そうであれば「その木にみあった肥料を与え、時には剪定をしたり、副木をしたりする必要がある」ということだ。そのことはとりもなおさず「それぞれの木にみあった育て方が必要だ」ということである。

また重賢は玉山にこう言った。

「人を育てるといふことは、その人間も前に横たわっている障害という川を越えさせて、希望に満ちた向う岸の社会へ渡すことです」

この考え方は面白い。

重賢のいうのは、川を渡すといふと、教育者はすぐ橋を架けることを考える。しかし育てられる側は、なにも橋を架ける場所だけにいるわけではない。川上にもいれば川下にもいる。そうであれば、川上にいる者に対しては、浅瀬を探して渡らせ、川下にいる者は水が深くて距離も遠いのだから船で渡ることを教える。

このように、いる場所いる場所(つまりその人間の能力)に応じた川の渡し方を考えてほしい」ということである。

これも現在の教育にぴったり当てはまる。

つまりマス教育や、「人間の一律化 規格化」になりかねない、IQ 重視の偏差値重視教育に、厳しい一打を与える。

重賢は「育てられる側の能力に応じた育て方をして欲しい」と主張した。

参考文献:童門冬二著「歴史に学ぶリーダーシップ」より

教育というのは「木づくり」「気くばり」ですね

?? 歴史から学ぶことは多いです。

この細川重賢の藩政改革を学び、参考にしたいのが上杉鷹山である。